中国古典文学大系 17

唐代詩集 上

田中克己
小野忍・小山正孝 編訳

平凡社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

洋
史学科卒。成城大学文芸学部教授。専攻　東洋学。主要著書　詩集「西康省」（コギト発行所）「楊貴妃とクレオパトラ」（元々社）「李白」（筑摩書房）「白楽天」（集英社）

小野　忍（おの しのぶ）　明治39年東京生。東京大学文学部支那文学科卒。和光大学教授。専攻　中国文学。訳著書「李家荘の変遷」（岩波書店）「腐蝕」（岩波書店）「現代の中国文学」（毎日新聞社）「中国文学雑考」（大安）

小山正孝（おやまさたか）　大正5年東京生。東京大学文学部支那文学科卒。中央公論社嘱託，関東短期大学助教授。専攻　近代文学，中国文学。主要著書　詩集「雪つぶて」（赤坂書店）「逃げ水」（ユリイカ）「散ル木ノ葉」（思潮社）

中国古典文学大系　全60巻

唐代詩集（上）　第17巻

昭和44年8月15日　初版第1刷発行
昭和52年6月1日　初版第7刷発行

編訳者　田中克己　小野忍　小山正孝

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下中邦彦

発行所　郵便番号　102　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京8-29639　株式会社　平凡社

不良本のお取換えは直接小社サービス課までお送り下さい（送料は小社で負担します）。
定価は外箱に表示してあります。

印刷　東洋印刷株式会社
製本　株式会社　石津製本所

© 株式会社　平凡社　1969　Printed in Japan

目次

李白

道士を訪う　一
高殿に登って　三
峨眉山月の歌　四
荊門を渡る　五
孟浩然を送る　五
侍御史劉綰に　六
襄陽の歌　七
元丹邱の歌　八
西岳雲台の歌　九
春の夜、洛陽で笛を聞いて　一一
天津橋　一一
太原の早秋　一三
旅中の作　一三
流人に会って　一四
長干のうた　一四
孟浩然に贈る　一六
関山の月　一七
蜀道難　一九
烏棲曲　二〇
烏夜啼　二〇
泰山に遊ぶ　その三　二一
南陵で子供と別れて入京する　二三
宜春苑に侍従して　二三
宮中行楽のうた　二四
　その三　二四
灞陵の送別のうた　二五
終南山を下って　二六
杜陵　二七
清平調のうた　二七
　その二　二七
　その三　二八
少年のうた　二八
長安の二月、三月　二九
月下にひとり飲む　三〇
太白山はなんと青いことか　三一
于闐花を採る　三三
王昭君　三三
高い山に登って　三三
梁園のうた　三四
鳴皐の歌　三六
酒をすすめるうた　三八
杜甫を送る　三九

堯祠で竇薄華を送る 四〇
李沈を送る 四三
旧遊を憶う 四四
夢遊のうた 四六
賀知章を憶う 四八
その二 四八
おなじく 四九
越中の懐古 四九
姑蘇台の懐古 五〇
天台山の朝のながめ 五一
海辺の朝霞 五三
楊燕を送って子を思う 五三
蓮の花とりのうた 五五
江南の女のうた 五五
その二 五五
その三 五六
その四 五七
その五 五七
酒盃をもって月に問う 五七
金陵での月下のうた 五七
金陵での月見 五八
鳳凰台での酒宴 五九
松と柏 六〇
東魯の二人の幼な児に 六〇
稚子伯禽を問う 六一
労労亭の歌 六三
揚子江をわたる歌 六四
その二 六四
その四 六四
その五 六五
戦城南 六五
酔後 六五
王昌齢の左遷を聞いて 六六
金陵の酒場の別れ 六六
金陵の諸公に別れる 六七
廬山の五老峰 六八
廬山のうた 六八
尋陽の紫極宮 六九
昔がたり 七〇
北方の馬 七〇
三十六万人 七一
元丹邱の山の家 七二
山中対酌 七二
無実を訴える詩 七三
酒と魚 七四
山中の問答 七四
邯鄲で妓を見る 七五
李知事に 七五
幽州胡馬客の歌 七六
胡に人無し 七六
とりでの下の曲 七七
その二 七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その三　八八
その五　八八
従軍のうた　八九
雲南征伐　八九
行き行きて且く遊猟するの篇　九〇
美人と会って　九一
酒に対して　九二
阿倍仲麻呂をいたむ　九三
遠い別れ　九三
蔡雄に感情を書いて贈る　九四
崔文兄弟に　九六
蝶のゆめ　九六
胡人の笛　九九
敬亭山にひとり坐す　九九
謝公亭　一〇〇
謝朓の北楼に登る　一〇〇
宣城の重陽節　一〇一
宇文太守と崔侍御とに　一〇二
つつじの花　一〇五
酒づくりを哭す　一〇五
五松山　一〇六
懐いを書す　一〇七
まこもの飯　一〇九
百四十年　一〇九
秋浦のうた　一一〇
その二　一一一
その四　一一一
その五　一一一
その八　一一二
その十　一一二
その十三　一一三
その十五　一一三
その十六　一一三
崔秋浦に　一一三
その二　一一四
秋浦の雪の夜　一一四
猛虎のうた　一一五
華山に上る　一一七
通塘のうた　一一八
廬山の屏風畳で　一一九
妻を送る　一二二
その二　一二二
永王東巡のうた　一二三
上留田のうた　一二三
逃亡の途中　第四　一二四
同　第五　一二四
南方への逃走中の心　一二五
宰相崔渙にたてまつる　一二七
尋陽の獄中より妻に　一二九
憤りのうた　一三〇
義弟宗璟に　一三三
上皇の西のかた南京を巡る歌　一三四

同　その九　一三四
同　その十　一三五
旧遊を思う　一四一
黄鶴楼上の笛　一四一
秋浦の桃の花を思う　一四二
江夏の修静寺　一四三
宋之悌と別れる　一四三
鄭判官と別れる　一四四
大赦に漏れて　一四五
流罪を許されず　一四六
流されて妻に　一四七
三峡を上る　一四八
巫山の最高峰に登る　一四九
巫山の下に宿る　一四九
朝、白帝城を発する　一四九
赦免のよろこび　一五〇
荊門に舟を浮かべて　一五一
江夏で　一五二
秋、荊門を下る　一五二
船旅で友人に　一五三
仙人官吏　一五三
荊州の歌　一五四
司馬将軍の歌　一五五
節士のうた　一五六
洞庭の水軍を見て　一五七
洞庭湖を眺める　一五八
洞庭の舟遊び　一五九
洞庭に遊ぶ　一六〇
その二　一六〇
その四　一六〇
賈至とともに湖を眺める　一六一
荊州の賊平らぐ　一六一
鸚鵡洲　一六二
禰衡をおもう　一六二
武昌で夜飲む　一六四
早春　一六四
江夏で韋冰に　一六五
季之遙に　一六六
その二　一六七
牛渚に泊まって　一六八
上雲楽　一六九
姑熟渓　一七一
謝公の宅　一七二
凌敵台　一七三
望夫山　一七三
われ衰えなば　一七四

杜甫

はるかに泰山を見て　一七七
房兵曹の異国の馬　一七八
鷹の画　一七九
左氏の荘園での夜の宴　一八〇
竜門　一八〇
酒のみ八仙人のうた　一八一
春の日に李白を思って　一八二
遠縁の済にあたえて　一八三
貧しい者の友情のうた　一八四
曲江のうた三つ（五句のうた）
その一　一八四
その二　一八六
その三　一八七
戦車のうた　一八九
出征　その一
その一　一八九
その二　一九〇
その三　一九〇
その四　一九一
その五　一九一
その六　一九一
その七　一九二
その八　一九二
その九　一九二
うつくしい人をうたう　一九二
鄭さんのお供で何将軍の山林に遊んだこと　十首
（そのうち七首）
その一　一九四
その二　一九五
その三　一九五
その四　一九六
その五　一九六
その六　一九六
その七　一九七
庭さきの甘菊の花をなげいて　一九七
秋の雨は
その一　一九八
その二　一九八
その三　一九九
劉少府の新しい山水画　二〇〇
出征　その二
その一　二〇一
その二　二〇三
その三　二〇四
その四　二〇四
その五　二〇五
ああ　陳陶斜　二〇六
ああ　青坂　二〇七
月夜　二〇八

春の眺め　二〇九
玉華宮　二〇九
羌村
その一　二一〇
その二　二一一
その三　二一二
北への旅　二一三
曲江　二首
その一　二一九
その二　二一九
李尊師の持って来た松の樹を描いたついたてについて
のうた　二二〇
はつ秋に暑さに苦しむ　書類がどんどんたまる　二二二
高式顔に　二二二
九日　藍田の崔さんの別荘で　二二三
崔さんの東山の草堂　二二三
新安の役人　二二四
潼関の役人　二二六
石壕の役人　二二七
新婚の別れ　二二九
老いぼれた者の別れ　二三〇
家族のないものの別れ　二三二
処士衛八に贈る　二三三
夏の太陽　二三四
うつくしい人　二三五
李白を夢に見て　二三五
その一　二三六
その二　二三七
秦州雑詩
その一　二三八
その二　二三九
その三　二四〇
その四　二四〇
その五　二四一
その六　二四一
その七　二四二
その八　二四三
その九　二四三
その十　二四三
その十一　二四三
その十二　二四四
その十三　二四四
月のあかるい夜　弟を思う　二四五
はるか離れた地で李白を思って　二四六
太平寺の泉の眼　二四七
目にふれるもの　二四九
こおろぎ　二五〇
ほたる　二五〇
秋の笛の音　二五一
野の眺め　二五一
異国の剣　二五二
秦州を出発する　二五三

鉄堂峡 二五三
塩井 二五四
寒峡 二五五
法鏡寺 二五六
竜門鎮 二五七
石龕 二五八
積草嶺 二五九
泥功山 二六〇
同谷県に仮住居してつくった歌 七編
その一 二六一
その二 二六二
その三 二六三
その四 二六三
その五 二六四
その六 二六四
その七 二六五
同谷県を出発する 二六七
木皮嶺 二六八
白沙渡 二六九
水会渡 二七〇
飛仙閣 二七一
竜門閣 二七二
剣門 二七四
成都府 二七五
草堂が出来て 二七六
気ちがい野郎 二七六
川ぞいの村 二七六
田舎おやじ 二七七
壁上の馬の画をうたって 二七八
たわむれに二本の松の画をうたう歌をつくってみた 二七九
へだてられて 二八〇
早起き 二八一
川のほとりで水勢が海水のように増したのを見ていさかの思いをのべてみた 二八一
お客さんが来た 二八二
川べりの亭で 二八三
川のほとりをひとり歩き花をたずねてつくった七編の詩
その一 二八三
その二 二八三
その三 二八三
その四 二八四
暴風雨のためにくすの木がひき抜かれてしまったことをなげいて 二八四
茅ぶきの屋根が秋風にこわされてしまったことを歌って 二八五
百の憂い集まることをうたう 二八六
病んだ蜜柑の木 二八七
枯れたしゅろの木 二八九
百姓のおやじさんが私をひきとめて酒を出し厳中丞のことをほめるのに出あって 二九〇
百姓のくれたさくらんぼ 二九一
大麦のうた 二九二
魚とりを見て 二九三

また　魚とりを見て　二九五
光禄坂のうた　二九六
苦しい戦いのうた　二九七
去年の秋のうた　二九八
旅のやどり　二九九
野の眺め
通泉駅、南方の通泉県へ十五里というあたりの山水を
　みてつくる　三〇〇
牛頭寺にのぼって　三〇一
舟の前の鵝鳥のひな　三〇二
雨をよろこぶ　三〇三
九日の節句　三〇四
ものうい夜　三〇五
夕　暮　三〇六
閬中を出発して　三〇七
空のはてのうた　三〇八
しゅろ竹の杖の歌　三〇九
閬州の山の歌　三一〇
閬州の川の歌　三一一
滕王の亭にて　三一二
玉　台　観
閬州から妻子をつれて蜀の山路を行くときの詩三編
　その一　三一三
　その二　三一三
　その三　三一三
成都の草堂に行く途中で詩が出来たのでまず厳武さんにささげる　五編のうち
　その一　三一四
　その二　三一五
　その三　三一六
草　堂　三一八
桃の木に寄せて　三一九
四本の松　三二一
水辺の手すり　三二二
帰る雁　三二三
絵画をうたう　三二五
村　雨　三二六
草とり　三二七
棺は故郷に　三二八
旅の夜の思い　三二八
仮の住居　三二〇
居を移すにあたって　三二一
水をひく
白帝城にのぼる　三三三
　その一　三三三
　その二　三三四
薪を負う者たち　三三五
達者な船のり　三三六
遠くまで行って信行が水道をなおした　三三七
雨　三三八
下男に草つみをさせて　三三九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ねむれない夜　二四〇
木の葉が散り……　二四〇
宗武の誕生日　二四一
すばらしい歌　二四二
秋の思いを　八編
その一　二四三
その二　二四三
その三　二四四
その四　二四四
その五　二四五
その六　二四六
その七　二四六
その八　二四七
古跡を思う
その一　二四八
その二　二四九
その三　二五〇
その四　二五〇
西のたかどので口ずさむ　二五一
鶏を縛るうた　二五二
人が訪ねてくれる　二五三
菜園　二五三
螢を見る　二五三
愁いをとく　十二編
その一　二五四
その二　二五四
その三　二五四
ふたたび愁う　十二編
その一　二五五
その二　二五五
その三　二五六
その四　二五六
また　呉さんに　二五七
ひとり居て
その一　二五八
その二　二五八
大暦二年九月三十日　二五九
公孫大娘の弟子が「剣器」を舞うのを見てのうたならびに序　二五九
冬至　二六二
ひどい寒さのうた　その一
その一　二六二
その二　二六三
人日
その一　二六四
その二　二六四
短歌行　二六五
舟の月　宿場が見え寺の近くで　二六六
舟で　二六七
夕暮に帰る　二六七
李さんのこと　二六八
王さんの家の宴に招かれて書きつけたうた二つ
その一　二六九

その二　三六九
未明　公安を出発する　三七〇
董頤に別れる　三七一
夜　ひちりきを聞いて　三七二
年の暮のうた　三七三
白馬潭を出発する　三七四
南へ行く　三七五
青草湖にて　三七六
流れをさかのぼって　三七七
折りにふれて　三七八
津口をすぎる　三七九
早　立　ち　三七九
清　明　三八〇
その一　三八〇
その二　三八一
雪を見て　三八二
旅　人　が　三八二
朱色の鳳のうた　三八三
小寒食の日に舟の中でつくる　三八三
風雨の中　舟のそばに花の落ちるのを見て　たわむれに　三八三
この詩をつくった　三八四
江南で李亀年に逢って　三八四
原　詩　三八五
地　図　四六三

解　説　四六五

李白

田中克己 編訳

道士を訪う

犬はせせらぎの音の中で吠え
桃の花は朝露にぬれて色が濃い。
林が茂っているので時には鹿が姿を見せ
谷が深く正午になっても鐘の音が聞こえない。
青いもやを左右にひきわけて竹が影をあらわし
滝が青い山から落ちている。
訪ねた道士のゆくえもわからないので
悲しくなってあちこちの松にもたれてみた。

＊ 五言律詩。もとの題は「訪戴天山道士不遇」。李白は二十五歳（開元十三）まで蜀（いま四川省）にいた。これは詩作のはじめのころの詠。戴天山は大康山、大匡山ともいい、李白の育った彰明県の北方にあるという。

高殿に登って

日は成都城(注一)を照らし
朝日かげは散花楼(注二)にかがやいている。
金いろの窓には刺繍つきの扉がはめこまれ
珠のすだれは巻かれて瓊の鉤にかけてある。
青空にとどく高いはしごを登り
目のとどくかぎり見晴らしてうれいを散らす。
ゆうべの雨は東の三峡(注三)の方に去り
春の大川は二すじの流れ(注四)となってめぐる。
いまここへのぼって眺めわたすと
まるで空中に遊ぶような気持がする。

＊ 五言古詩。同じく蜀にいた時、成都の散花楼にのぼっての作。もとの題は「登錦城散花楼」。

注

一 成都城　原文「錦城」。錦官城ともいい、四川省の首都、いまの成都市。
二 散花楼　隋末に蜀王楊秀が建てたという。
三 三峡　四川という名のもととなる岷江・沱江・涪江・嘉陵江の四流が

合して長江（俗称揚子江）となり、四川盆地から大巴山脈を峡谷となって破り東流する。ここにある急湍のうち瞿唐峡・巫峡・西陵峡を三峡という。

四　二すじの流れ　成都をめぐる二流。

峨眉山月の歌

峨眉山上の秋の片われ月は
平羌江に影をうつして流れてゆく。
この夜わたしは清渓を出発して三峡に向かったが
もはやなつかしの月は見えず渝州まで下った。

＊　七言絶句。李白の代表作の一。地名が多く出ているのも、その四川を出る記念作のせいであろう。二十五歳の時の作。

注

一　峨眉山　四川省西部の名山。標高三〇三五メートル。絶頂に寺があり、李白がここに参詣したことは、別に「登峨眉山」という詩があるので知られる。

二　平羌江　岷江の支流。別名は青衣江。峨眉山の北東を流れる。

三　清渓　岷江と平羌江の合流点よりさらに下流の犍為県の清渓駅。

四　三峡　前の詩の注三を参照。

五　渝州　清渓駅と三峡の中間にあるいまの重慶市。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com